

「死とは何か」～生きることのつながり～ 木村有成

「前巻」

人は必ず「死」と向き合うのに、それについて、すこし深く語り合ったり考える機会が少ない。

7月5日の大予言の日、人々、世間は恐怖におびえていた。しかし、ほとんどの人は、その反対のことを思っていた。「なぜそんなひどいことが起きているのか？」と、実際死んだら、今の世界の100倍便利で、平和な世界がもしあればいい。

多くの人々が「死=悪い出来事」と思っているが、ほとんどの人は、本当にそうなのかな？と、思っている。死の本当の意味を掘り下げてみることにした。

～第1章～「3つの視点から見た「死」」

| | 内容 | 事例 | 一言まとめ |
|-----|----------------------------|-----------------------------|------------------|
| 科学的 | 死=必臓などの働きが止まった状態 | 必臓が止まる etc... | 体が働かなくなること |
| 文化的 | 死=この世からあの世に行くこと、別の世界に行くこと。 | 天国に行く、地獄に行く、さんずの川を渡る、etc... | 意識が次の世界に移る |
| 社会的 | 死=周りの人に大きな影響を与える出来事。 | その死が行く戦争などで、多くの人々が死んでしまうこと | 周りの人や社会に影響を与えること |

～第2章～「終りと始まりのつながり」

まず、人は「死」を「全ての終わり」と考える。だから、本当にそうなのかな？

例えば「夕日」太陽が沈むとき、ほとんどの人は「日が終わった」と感じるが、それと同時に「夜が始まった」とも言える。つまり、一つの出来事に、2つの意があるということだ。

死もこれと同じだ。1つの見方では「命の終り」として「お別れ」。もう1つの見方は「別の世界での命の誕生」でもある。こう見ると死はただの終りではなく、始まりと終りが同時に起こることだと言える。

～第3章～「3つの死」

1. 自らの死 “終りに向き合う”
 - ① 感 さげられたい終りへの悲しみ、未来が見えない不安
 - ② 例 真、暗闇トンネルに一人で入る
 - ③ ホ 誰にも代われない、生き方と向き合う瞬間
2. 親しい人の死 “周りの人の心を中らす”
 - ① 感 会えなくなるさみしさ、悲しさ、これからどう生きるか考えさせられる
 - ② 例 本の「ヘリ」が石で落ちた
 - ③ ホ 本は続くけど、「ヘリ」は戻らない、悲しみは支えとなり、残された人の生き方に影響を与える
3. 矢張り人の死 “集れば社会を変え”
 - ① 感 忘れられて軽蔑、数がと増えた時の圧倒的な重さ
 - ② 例 小さな火はすぐに消えるが、大きな火は社会を中らす。

～第4章～「死後の世界」

“信じるものが生み出す世界”

死後の世界はただ待っている場所ではない。そこへ行く世界は、本人が「どうなりたいか」を信じてきたかによって決まる。

希望を信じた=安心や光の世界
不安を信じた=思っていたことがそのままだ、何も信じなかった=無の空間 返ってくる

つまり、死後の世界は、その人が長い時間をかけてつくった舞台なのだ！

～第5章～「死が持つ制限の効果を想像してみよう」

死が「極端に遠く、100億年後にしか来なかったら？」

きっと、夢も努力も全てを先のまじにしてしまったら、まだ時間があると思えば、行動する理由が消えてしまう。つまり、人を動かすのは「死」という制限だ。そしてこの効果こそが、ほとんどの毎日をじゃらじゃらさせてくれる。

～第6章～「終りが生かす生きる」

死はたしかに恐ろしい。しかし、価値あるというわけではない。その逆だ。死があるから人は「今日やる」と思える。死があるから、出会い、挑戦、挑戦が特別になる。

死があるから、ぼくたちは本気で生きられるのだ。つまり、死は終りではなく、限りある時間を意識させ、生きることを深く強く光輝させる境目である。

「最終結論」

～本当の「死」の姿へ～

死の真の意味とは—

死は多くの意味を持ち、生を制限するから、新しい始まりを開く境目である！

そして、この存在があるからこそ、今を大切にし、生きる意味を深く感じることが出来る！

そして、ぼくは思った—

今を最大限に、楽しく生きる！！

to the next dimension